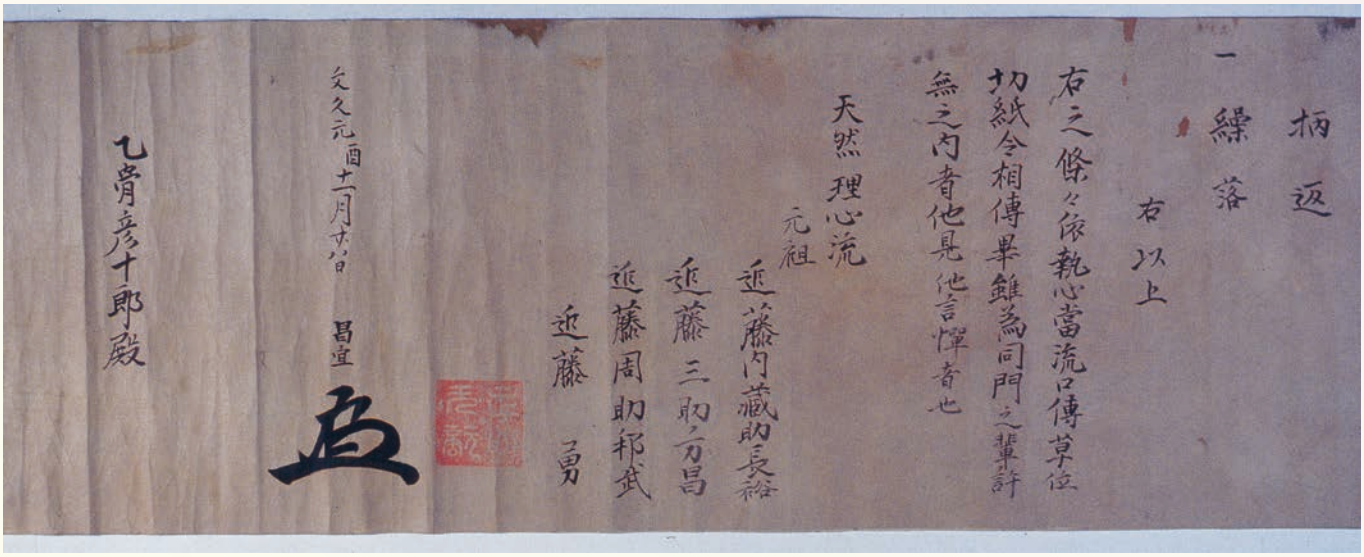
沼津市明治史料館通信
二〇二四年一月
通巻156号

■シリーズ　沼津兵学校とその人材　109
　　乙骨彦十郎の天然理心流切紙
■江原素六とその周辺　69
　　高野熊之助の死と江原素六


柄返
一繰落
右以上
右之條々依執心當流口傳草位
切紙令相傳畢雖為同門之輩許
無之内者他見他言憚者也
天然理心流
元祖
近藤内蔵助長裕
近藤三助方昌
近藤周助邦武
近藤　勇
文久元酉十一月廿八日　昌宜
乙骨彦十郎殿

近藤勇が乙骨彦十郎宛に発給した天然理心流切紙

文久元年（1861）

1996年撮影・当時大野嶺生氏所蔵。残念ながら、その後大野家伝来の資料はすべて失われ、現存しないとのことである。この写真には写っていないが、さらに「試合口三本/一柄之事/一先之事/応之事/一草位/一柄砕　三組/一鐺拵　二組」という７行分が右側に残っていた。

柄返
一繰落
右以上
右之條々依執心当流口伝草位
切紙令相伝畢雖為同門之輩許
無之内者他見他言憚者也
天然理心流
元祖
近藤内蔵助長裕
近藤三助方昌
近藤周助邦武
近藤　勇
印
文久元酉十一月廿八日　昌宜（花押）
乙骨彦十郎殿

シリーズ　沼津兵学校とその人材　109

乙骨彦十郎の天然理心流切紙

維新後に沼津に移住した旧幕臣に大野鳴石（藤十郎、一八一〇～九七）という人物がいた。幕末に作事奉行支配組頭・工兵差図役頭取などをつとめたほか、俳人としても知られた（『近世・近代ぬまづの俳人たち』）。その子大野伴三（辰之助）は沼津兵学校暫定生徒や沼津学校附属・二等勤番組となったほか、もう一人の子大野当儀（一八四六～一九一六）も沼津兵学校に学び、廃藩後は沼津近辺の小学校教師を歴任した（拙稿「沼津兵学校関係人物履歴集成」『沼津市博物館紀要』22）。

この大野家に伝来した資料のひとつとして、後に新選組局長となる近藤勇（昌宜）が、文久元年（一八六一）一一月二八日に乙骨彦十郎という人物に与えた剣術の巻物があった。前半部分が欠損してしまっていたが、その内容から判断し（小島資料館蔵の嘉永二年九月近藤周助邦武発給小島鹿之助宛切紙と比較）、「切紙」であると考えられる。切紙とは、目録や免許に進む前の、剣術における初級段階の資格である。近藤勇は天然理心流宗家四代目を継いだばかりの時期で、浪士組（後の新選組）に参加し上洛するのは二年後のことだった。

ところで近藤に師事したこの乙骨彦十郎という幕臣のことである。富士見御宝蔵番をつとめた太郎左衛門を祖父、西丸御裏御門番与力をつとめた太郎左衛門を父に持ち、嘉永六年（一八五三）五月に家督、父と同じ職を奉じ（『江戸幕臣人名事典』）、安政三年（一八五六）時点では四谷北寺町の一四〇坪余の屋敷に住んでいた（『諸向地面取調書』）。安政六年（一八五九）に二三歳だったことが判明しているので、切紙を受けた時は二五歳であり、師近藤より三歳ほど年下だった。維新後は静岡藩士となり、遠州横須賀の割付（『駿藩各所分配姓名録』）、明治二年五月時点では三等勤番組として駿府研屋町磯谷屋長兵衛方に仮寓し（『静岡市史　近代史料』）、後に宿駅掛に配属され、宿駅詰下役として蒲原宿で勤務した（『静岡御役人附』）。明治二年（一八六九）一〇月二七日、静岡から東京へ向かった渋沢栄一は、蒲原宿で昼食をとったが、「同所詰乙骨彦十郎といふ者、前田重吾縁者なるか旅店に来り面話す」と日記に記した（『渋沢栄一伝記資料』第二巻）。常平倉（静岡商法会所）で渋沢の部下だった前田重吾という藩士の縁者だったというのである。

同じ頃、静岡藩には、会計掛に属し貫目改所詰筆生をつとめた「乙骨彦八郎」という別人が存在した。彼は後に乙骨安民と改名し、静岡藩史生（明治三年閏一〇月）、大蔵省等外二等附属（六年三月）、租税寮十五等出仕（七年一二月）、関税局九等属（一一年二月）といった経歴をたどり、一二年（一八七九）に没している（国立公文書館蔵「太政類典　第三編」）。

同姓の沼津兵学校二等教授乙骨太郎乙の家系については、武田遺臣の初代太郎左衛門安利、二代彦十郎安一、三代太郎左衛門安道、四代太郎左衛門安良、五代太郎左衛門安蔵、六代半右衛門安雄、七代彦十郎安承、八代太郎左衛門安勝、九代半右衛門安知、一〇代太郎左衛門安定、一一代彦四郎（耐軒）と続いた家の一二代目とする文献（永井菊枝『小伝乙骨家の歴史』）と、太郎左衛門安利（元和二年没）→中略→六蔵（享保一二年没）→半右衛門安雄（安永八年没）→六蔵安勝（寛政五年没）→半右衛門安忠（天保一二年没）→耐軒（安政六年没）→太郎乙とする文献（『寛政譜以降旗本家百科事典』第一巻）もある。乙骨太郎乙家文書に含まれる由緒書・親類書によれば、半右衛門安忠には婿養子耐軒とは別に、実子半十郎（西丸御徒から浪人、安政五年時点で故人）がおり、半十郎には鼎三郎・鈴之助という息子たちがいたこともわかっている。西丸御裏御門番与力をつとめた彦十郎や乙骨安民の家との関係ははっきりしないが、西丸御裏御門番与力をつとめた彦十郎が先祖「彦十郎」の通称を襲名している点に注目すると、彼のほうが本家だったのではないだろうか。『寛政譜以降旗本家百科事典』第一巻でも、太郎乙家は彦十郎家の分家だろうとしている。

肝心の天然理心流を学んだ乙骨彦十郎のその後の消息はわからない。彦十郎宛の切紙が大野家に残されていた理由も不明である。駿東郡元長窪村の旧幕臣集住地「御長屋」に移住した藩士に「乙骨安直」がいたが（『長泉郷土誌』）、それが彦十郎のことであろうか？　安直は明治三一年（一八九八）時点でも健在で、旧幕臣の親睦団体・旧交会の豊多摩郡担当の幹事だった（『旧交会々員宿所姓名録』）。

（樋口雄彦）

江原素六とその周辺 69

高野熊之助の死と江原素六

江原素六が明治初年のことを回想した中に、以下のような内容がある（『自叙伝　予の受けたる境遇と感化』・一九六六年・江原素六先生顕彰会、原本は『現代名流自伝』・一九〇八年・新公論社）。藩の少参事に任命されるため静岡に赴いた際のこと。「銚子に吹付けられた脱走連中」、すなわち銚子沖で沈没した榎本武揚率いる脱走艦隊の一隻・美加保丸の乗船者たちの一部は、新政府軍に降伏し、藩に引き取られていた。謹慎生活を送ることとなった静岡の牢屋内では帯刀を許されなかったが、「高野」という人物は「大小だけは落したくない」と刀を差し出すことを拒否した。すると藩の役人は、いきなり抜刀して高野を斬り捨ててしまった。この「殺伐」で「至極惨酷」な一部始終を知った江原は、絶対に使うまいと決めていた持ち金を、死んだ高野の見舞金にしたという。

右に登場する高野という旧幕臣は熊之助という名前で、沼津兵学校生徒となった後の政治家島田三郎ともごく親しい仲だった。島田の回想（「同方会賛成の旨趣」『同方会報告』第四号、一八九七年）によれば、同じ芳野金陵門下で、「昇平学校の書生で幕府小臣の厄介たりし高野熊之助と云ふ人」は、「五六歳ほど上であるが此人は其当時書生仲間の暴れものゝ隊長であつた」といい、「武術も達者で激烈なる鎖港家で又水戸学崇拝の人」だった。そして戊辰の時は、「奥羽の役会津仙台に行き再び東京に帰つて参り夫から箱館へ行くと云つて船に乗つたが銚子で破船して遂に静岡に至り不幸の変死を遂げました」とのこと。外国風を嫌う「頑固者」だった高野の影響から、島田も「鎖港主義」だったが、脱走前に高野が言い残した、将来のある者は洋学を学ぶべしとの言葉に感服し、攘夷思想から脱するきっかけになったという。芳野塾の門人録（「芳野金陵家塾「逢原堂」門人録の翻印」『二松学舎大学東アジア学術総合研究所集刊』51）によれば、高野の入門は安政六年（一八五九）であり、慶応三年（一八六七）八月入門の島田にとっては大先輩だったことがわかる。

さて、島田の証言では高野は静岡で変死したというが、江原の回想によって殺害されたことがわかるのである。江原が属した幕府陸軍の撤兵隊の慶応四年三月時点での士官名簿には、交際総括・差図役下役として高野熊之助の名前があることから（拙稿「江原素六の戊辰時脱走抗戦関係史料」『沼津市博物館紀要』33）、もともと二人は知り合いだったと思われる。慶応四年九月、山岡鉄太郎（鉄舟）が新政府に対し、自訴した美加保丸の乗組者四八名について謹慎させることを願い出た書類にも、「元撤兵差図役下役高野熊之助」の名が含まれる（『復古記』第七冊）。

壮士之墓
静岡市葵区・宝泰寺

左側面に高野熊之助忠雄の名が彫られている。基台に彫られた建立者の中にも高野姓があり、遺族かもしれない。

静岡市葵区の宝泰寺に残る「壮士之墓」は、明治二年（一八六九）九月に建てられた、美加保丸関係者一二名の追悼碑である。慶応四年八月の沈没時の死亡者のみならず、明治二年の死亡日が記されている例もあることから、その後の病死者などを含むらしい。一二名の一人として、「高野熊之助忠雄　明治元年戊辰十月十六日　享年二十五」と彫られており、彼の死んだ日付や諱が判明する。一二名中、同じ日付は染谷菅八郎忠彰・二四歳、村井雄三郎当斎・二四歳にもあり、三人は同時に斬殺されたのであろうか。藩の公式記録では、処罰の申し渡しの際に手向かったため、高野・染谷の二人が討ち果たされたとする（『徳川脱藩人事典』追加・訂正版）。高野・染谷らは処刑されたのだとする文献もあるが（漆畑弥一『静岡市伝馬町誌』、一九七七年、静岡市伝馬町報徳社）、江原の回想のごとく、突発的な出来事だったと思われる。

江原は明治元年一〇月二一日に陸軍御用重立取扱に任命されており、沼津から駿府（まだ静岡ではない）に行ったのはそのためであろう。少参事の任命というのは記憶違いである。そして、その数日前に高野が殺害されたとの事実を知ったのである。

（樋口雄彦）

明治史料館 新ミュージアムグッズ ポストカード人気ベスト５

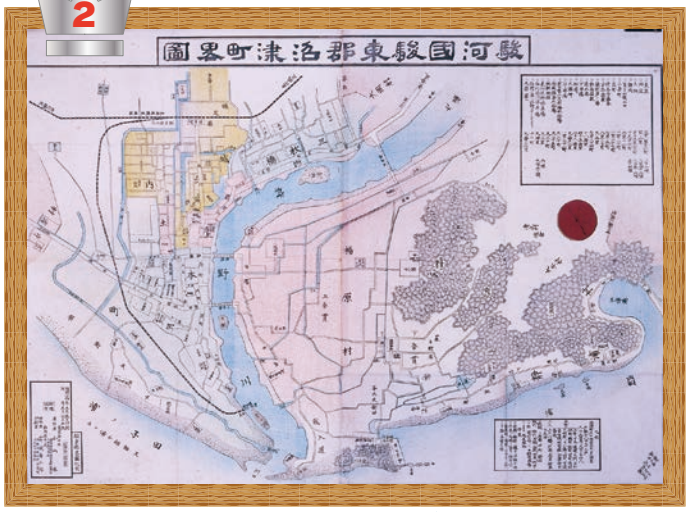
沼津市制100周年を記念してポストカード（全50種）を制作しました。

1

「西浦木負　夕照の入江」
「沼津から見た富士山八景」より
平成初期

富士山とスカンジナビア号
やっぱり絵になるなぁ！

2

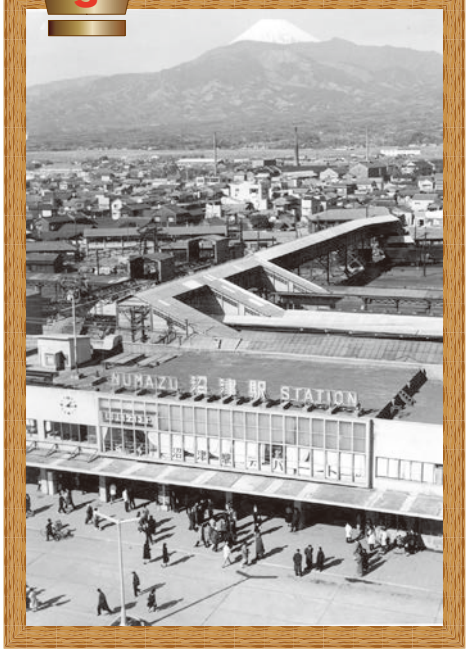


「駿河国駿東郡沼津町略図」
明治24年（1891）

明治の沼津が
一目で分るね

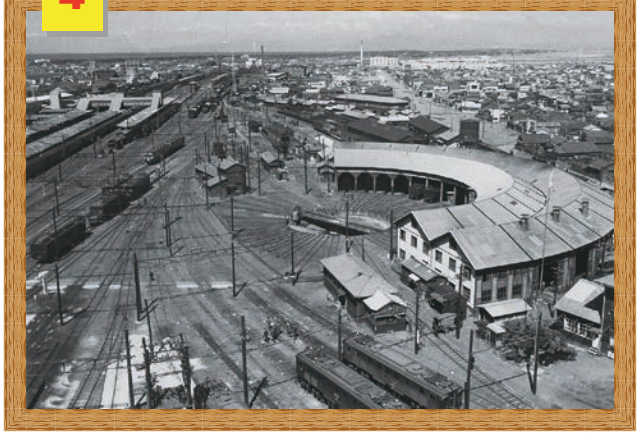
3

駅北エリアが便利になったね



北口が開設された頃の沼津駅
昭和32年（1957）

4



沼津機関区
昭和32年（1957）５月22日

扇形の車庫に転車台
カッコイイ!!

人事異動

令和５年10月31日付で事務補助員鈴木和香が退職、11月１日付で事務補助員吉川由佳が着任しました。今後ともよろしくお願いいたします。

5

沼津駅前通り
昭和初期

チンチン電車　乗ってみたい！

沼津市明治史料館通信

第156号

令和６年１月31日

編集・発行　沼津市明治史料館
〒410-0051 沼津市西熊堂372-1
TEL 055－923－3335
FAX 055－925－3018
印刷　みどり美術印刷株式会社

ポストカードは全50種
１枚100円
当館受付で好評販売中です！